



悪の組織の
敵幹部に監禁調教
されちゃいました

プロローグ…堕ちゆく魔法少女

深夜の港湾地区は、闇がひっそりと支配していた。

月明かりは厚い雲に覆われ、海面に浮かぶ貨物船の影が、まるで沈黙する怪物のように揺れる。

錆びついたコンテナ群の間を、黒いローブを翻して一人の少女が駆け抜けた。

——天ヶ瀬ルナ。光の魔法少女。

息は上がり、額には冷や汗が滲む。けれど足を止めることはない。

「……今日こそ、あいつらを倒す……！」

胸の奥に燃えるのは正義と使命感、そして何よりも——あの三人への屈辱の記憶だった。

何度も戦い、何度も逃げ延びた。だが、彼らは必ず現れる。執拗に、しつこく、まるで彼女の存在そのものを狙い続けているかのよう
に。

その夜も、情報は確かだった。《ノクターン》の幹部たちがこの港に
集結している。

組織の中枢に近づく、これ以上ない機会。仲間たちは別の地点で陽
動に回り、ルナは単独でこの場所に侵入した。

だが――。

「……おや、もう来たのか。感心だな、君は」

低く冷ややかな声が、錆びた鉄の通路に響く。

コンテナの影から現れたのは、銀髪をなびかせながら、白衣の裾を

翻す男——クレインだった。

眼鏡の奥の瞳が淡く光り、彼女を顕微鏡で観察するかのよう細められる。

「クレイン……っ！ 今日こそ、あなたたちを——」

「その決意、何度聞いたかな。記録に残しておこうか」

次の瞬間、背後から冷たい金属音。

振り向いたルナの視界を、黒革の手袋と軍服の影が塞いだ。

「油断しすぎだ、魔法少女。俺が背後を取るなんて、初めてだろ
う？」

赤髪の青年——ヴァルド。

金色の瞳が薄く笑い、革手袋を鳴らす音が耳元に近い。

その距離に、背筋がぞくりと震えた。

「……二人だけじゃないよ」

背後の闇から、ゆっくりともう一人が姿を現す。

黒髪に紫の瞳、優雅な礼服を纏い、口元に微笑を浮かべる貴公子

——リユシアン。

その微笑は柔らかいのに、視線だけは氷のように冷たく、逃げ道を塞ぐ檻のようだった。

「会いたかったよ、ルナ。……でも、君は僕から逃げてばかりだ。寂しかった」

「……ふざけないで……!」

魔力を高め、手の中に光の槍を形成する。

だが三人は微動だにしない。むしろ余裕を楽しむように、ゆっくりと彼女を囲む。

「抵抗するのは勝手だが……」

ヴァルドが鞭を手に取る。そのしなりが空気を裂き、耳元で鋭く鳴った。

「……すぐに、その体ごと制圧してやる」

次の瞬間、足元の床が淡く光り、魔法陣が展開された。

クレインの指先が端末をなぞり、ルナの足を絡め取る透明な拘束フィールドが起動する。

「っ……………!? これは……………!」

「君専用に調整した感覚制御フィールドだ。力を込めれば込めるほ

ど、神経に干渉して感度が上がる。……面白いだろうか？」

体が重くなり、魔力が思うように練れない。

焦りと同時に、足首からじわりと伝わる奇妙な感覚——まるで脈打つような微細な振動。

思わず息を呑んだ隙を、ヴァルドが見逃すはずもなかった。

「……捕まえた」

鋭く伸びた腕が彼女の腰を掴み、背後から引き寄せる。

鞭の柄が顎を持ち上げ、動きを封じる。

「離せ……！」

「無理だな」

リュシアンがゆっくりと歩み寄り、彼女の頬に指先を這わせる。

その瞳が、まるで獲物を見つめる捕食者のように細められた。

「……ようやく君を、僕たちの場所に連れていける」

そう囁いた瞬間、視界が暗転する。

頭に触れたクレインの装置が微弱な衝撃を与え、意識を薄く曇らせる。

倒れ込む彼女を、三人の腕が同時に受け止めた。

次に目を覚ましたとき、ルナは冷たい金属台の上にいた。

手首と足首には太い拘束具、腰と首にも固定バンド。

天井には無数の機械アームと、彼女を監視する赤いカメラの光。

「……ここは……」

「《ノクターン》の心臓部だよ。君のために、部屋を用意した」

耳元で甘く響くのはリュシアンの声。

反対側からはクレインが端末を操作しながら、無機質な口調で言う。

「まずは基礎データの収集から始める。脈拍、呼吸、体温、筋肉反応……それから感覚耐性の限界まで、ね」

足音と共に、ヴァルドの影が近づく。

手には黒革の鞭が握られ、金色の瞳が愉悦に細められていた。

「逃げ場はない。……今日からは、お前の声も、涙も、全部俺たちのものだ」

ルナの心臓が高鳴る。

恐怖か、それとも予感か。

これから自分に何が起こるのか、想像するだけで――胸の奥がざわめく。

そして、三人の影が重なり、光の魔法少女の物語は、堕ちゆく快樂の幕を開けた。

第一章…研究者《クレイン》

金属の冷たさが背中を這い、ルナははっと息を呑んだ。

意識はもうはつきりしている——だが、両手首も足首も、太く無骨な拘束具に覆われ、びくりとも動かない。

「……離して……っ！」

声を荒げても、返ってくるのは冷ややかな足音だけ。

白衣の裾を揺らし、クレインがゆっくりと視界に入ってくる。

眼鏡越しの淡い光が、冷徹な科学者の顔を照らしていた。

「ルナ。抵抗はやめたほうがいい。データを取る前に、力を消耗してもらっては困る」

「……実験、なんて……ふざけないで……!」

彼は無視するように、台の脇に設置された黒い端末を操作する。

無数の機械アームが天井から降下し、先端のアタッチメントがゆつくりと彼女の体をなぞる。

金属の触れ方は冷たく、けれどもどこか生物的で、ぞくりと背筋を這い上がった。

「まずは感度の基準値を測る……君がどこまで、耐えられるか」

淡々とした声。

けれど指先で軽く彼女の顎を持ち上げた瞬間、唇の端に僅かな笑みが浮かんだ。

くちゅっ……

「……っ!?!」

太ももの内側に吸いつくようなカップ状の機械が密着し、小さく湿った音を立てる。

そのまま、低い振動がじりじりと伝わり、ルナは思わず腰を逃がそうとした。

「いい反応だ。……予測のデータよりずっと、感じている」
端末の画面には、脈拍と皮膚温度の上昇が数値化されて映っている。

クレインの指が画面をなぞるたび、振動のリズムが変わり——じゅるる……っといやらしい吸引音が響く。

「や……やめ……っ」

「声も記録しよう。良いデータが取れそうだ」

さらに別のアームが胸元へ降り、服を裂くように切り開く。

冷たい金属片が肌に触れ、「くちゅっ」と音を立てながらゆっくりと吸い付く。

「ん……っ！ はぁ……っ！」

「そう……その声だ。もっと聞かせてくれ」

クレインの瞳が、計測器ではなくルナそのものを食い入るように見つめている。

研究者の仮面の下から、確かな執着の熱がにじみ始めていた――。

「さて、次の段階に移ろう」

胸の上に置かれた薄膜センサーが波形を描く。呼吸が落ち着くほ

ど、機械の刺激は逆に繊細になっていく。

太ももから鼠蹊へ、鼠蹊から下腹へ、涼やかな電気の唇が触れるたび、体内の奥へ奥へと火花が落ちた。

ちゅぷ　くちゅっ　ちゅぷ

ルナは首をかすかに振り、頬を熱くする。羞恥が先に立つのに、身体のほうが素直にほどけてしまうのが悔しい。

「い、いや……っ！」

そんな彼女の心の揺れを、クレインは逃さない。手を握り、囁きが耳殻へ滑り込む。

「なぜ嫌がる？ データはこんなにも感じていることを表しているぞ」

「……う、うるさい！」

反射で返す声は、かすかに甘く濡れていた。

クレインが淡々と数値を読み上げる。「端部感受性、基準比一二五パーセント。良好。次段階」

ぱちり——細い光が瞬いて、別のアームが胸元へ。冷たい輪が尖った突起を包む。

くちゅつ、と柔らかな真空の口づけ。微細振動が円を描いて広がる。

「あ……っ」

声がほどける。輪はきゅむ、と僅かに締まり、また緩む。

片方が優しく吸えば、もう片方は焦らすように間を空ける。非対

称。その差が、脳のどこか甘い場所を確実に犯していく。

じゅる…… くちゅ くちゅっ

「なるほど。焦らすと快楽が上昇するのか——いいぞ、ここから強度を少し上げる」

振動が半音、深くなる。

輪の締め付けが一拍遅れて応える。焦らし。遅延。待たされるほど、身体は勝手に期待の形に尖っていく。

ちゅぷ…… じゅるる…… くちゅっ

「っ、ん……クレイン……っ、あの……」

もどかしさのあまり、思わず名前を呼んでしまった。

「どうした？」

「……違う、なんでも、ないっ」

羞恥に必死で耐える姿を見て、傍観していたリュシアンとヴァルドは笑う。

「あははっ…可愛いなあ」

「ああ。早く俺の番が来るのが楽しみだ」

次の段階。下腹部のパッドが配置換えされ、細いノズルがわずかに角度を変える。

温度は体温より少し低い。触れる直前に感じる冷氣が、却って熱を煽る。

くちゅ……　ちゅぷ　ちゅぷ……

ノズルの先はどこにも挿入しない。ただ縁をなぞり、逃げると追

い、止まればすぐ傍で待つ。

期待は満たされず、しかし否応なく溜められていく。

腰がわずかに浮いた瞬間、ヴァルドの掌がお腹に軽く置かれた。支えるだけ。押さえつけない。

「奥は、まだだ。焦らすことに意味がある」

彼の声は低く乾いているのに、不思議と安心する。境界線を守る声。

ルナは自分の呼吸が自然に指示へ同調していくのを感じた。

じゅるる…… くちゅっ…… ちゅふふ……

小さく震えるたびに、センサーが光り、クレインの指先がパラメータを撫でる。

「感度分布、ピーク帯が移動——追従。少しだけ、奥へ寄せる」

ノズルが、触れる。触れない。ぎりぎりの境。

触れた、と錯覚した瞬間、輪のほうの吸い上げが強まり、全体の焦点がふつとずらされる。

ほどけかけた波が、もう一度たまる。その繰り返し。

ちゅ…… く、くちゅっ…… じゅる……

ルナは堪え切れず、自分の手をきゅっと握りしめた。

「分析データだけでなく、自覚感覚のデータも欲しいな。今、どう感じている？」

羞恥が喉に熱を残す。

「……言うわけ、ない」

「仕方がない。では、体に聞こう」

クレインの指がタップする。ノズルは僅かに角度を変え、ほんの一瞬だけ中心を撫でた。

電流のように甘い刺激が跳ね、背が弓なりに浮く。

くちゅっ——

「あ、っ……！」

すぐ引く。追い込まず、救わず、次の波を仕込む。

ヴァルドのメトロノームが速まる。床を打つ鞭の音が、鼓動と重なる。

輪が締まる。ノズルが掠める。息が詰まる。吐く。吸う。甘い眩暈。

ちゅぷ、ちゅぷ、じゅるる、くちゅっ……

「いい反応だ。ここで一度、休止」

「や、だめ、いま、止めないで……」

言葉が自然にこぼれ、頬が熱で疼く。

クレインがわずかに息を飲み、眼鏡の奥で視線が熱くなる。

「続行。強度、三パーセント上げ。中心の接触は一拍遅延、縁の撫でを先行——」

機械は従順だ。指示どおり、完璧に。

じゅるる…… くちゅ…… ちゅぷ…… ——そして、狙い澄まし

た一点。

くちゅっ

「っ、——あ、っ、ん……………」

波が上がり、下がり、また上がる。

足首のベルトが大きく揺れた。

輪の吸い上げが同期し、ノズルが一瞬の深さで触れ——すぐ退く。

ちゅ、くちゅっ、じゅる……

「ずるい……ずっと、あと少し、って」

「あと少しが、いちばん美味しいんだよ」

リュシ안의指が喉元を撫でる。声が震え、胸の奥の何かが音を立てて崩れた。

クレインが短く告げる。「なら、お望みの通り、次で小波を一つ越え

る。」

越えたい。越えたくない。越えたい。——越えたい。

端末の光が一段深くなる。

輪の締め付けが互い違いに強まり、ノズルの先が中心をなだらかに円で撫で、最後に一滴のような圧を落とす。

くちゅっ——　じゅるる……

「ああっ……！」

短い声が跳ね、体内で結ばれていた結び目がきゅつとほどける。

それは大きな絶頂ではない。けれど確かな、小さな山の崩落。

波が静かに引いていく間、余韻を丁寧を受け止める。

「……はあっ……はあっ……」

「休憩にはまだ早い、ここからが本番だ。深さを変える。君が望む熱と、望む速度だけ。——行くぞ」

天井のアームが、静かな唸りを増していく。

次の瞬間、ノズルは容赦なく一点を貫くように押し当てられた。

くちゅっ——じゅるる……っ

快感が一気に炸裂し、背が大きく跳ねた。

だが、それすら長くは続かず、またすぐに引き剥がされる。

そしてまた、輪もノズルも同時に全開となる。

くちゅっ……じゅるる……ちゅぷ……くちゅっ……

怒濤の刺激が押し寄せ、全身が弓なりに反った。

視界が白く弾け、声が零れ、胸の奥まで支配されるような感覚に飲ま

れていく。

「あ、っ……あああっ……!」

与えられては奪われ、また与えられる。

それが繰り返されるたび、思考が削がれ、ただ“もつと”と求める欲だけが残っていく。

脈打つ胸の鼓動に合わせ、乳首を覆う輪がきゅううと細かく締まり、甘い痺れを延々と送り込む。

下腹の奥はまだじんじんと熱を帯び、触れられた余韻が残っている。

「……少し、休ませ……」

細く漏らした声を、ヴァルドの乾いた笑いがかき消す。



悪の組織の
敵幹部に監禁調教
されちゃいました